



講演要旨
【博物館】

だて歴史文化ミュージアムスタートアップ講演会

〈講演〉「戦国大名伊達家の書籍蒐集と伏見政権の文化政策」 －伊達家の漢籍を中心に－

東北大學・名誉教授 磯部 彰氏

文学博士。専門は東アジア文化史・中国文学。



(1) 武家と書籍蒐集

戦国大名らは、豊臣政権そして次の江戸幕府に組み込まれる中で、どのような書籍をいかなる目的のために蒐集したのでしょうか。仙台伊達本家を中心に実際の資料を紹介しつつ、その目的についてみていきます。時代は豊臣家が天下統一した伏見時代から江戸時代初期の寛永頃まで、つまり豊臣秀吉や徳川家康から徳川家光の時代で、ちょうど伊達政宗一代に該当します。

なぜ、蔵書やその内容が大名家や政治を研究するのに重要なのかを述べたあと、主に伊達家の漢籍を中心に江戸初期の和本までの蔵書から戦国大名の政治的立ち位置が分かる点を指摘します。最後に、戦国大名にとって蔵書、漢籍、とりわけ宋版と呼ばれる初期の出版物はいかなる意味を持っていたかをお話しし、本の蒐集は政治動向ともからむことから、伊達家など戦国大名の動きが、蔵書からも知ることができる点を指摘して話をまとめたいと思います。

(2) 豊臣秀吉の公家化と伏見・大坂時代の文化政策

室町幕府が弱体化し、戦国大名が霸権を競うようになると、有力な武家は五山^{※1}僧を軍師や参謀として招へいしたり、自分の家の子弟を入山させ、学問を修めさせたりしました。

当時、京都五山には、宋元時代の漢籍、もしくはそのリプリント版(五山版)が多く存在しました。しかし、戦国時代の武家にとって、五山僧とのつながりをもつたとしても、まだそのルートから入手できた漢籍や五山版漢籍は少なく、わずかに所有する漢籍(戦争の方

法論の書籍)と戦記(各武家の実戦記録書籍)を利用していたと思います。当時は戦国の世ですから、戦国大名は兵法書と応仁の乱以後の実戦記を見て実戦に使っていたらしく、すぐには役立たない儒教書籍などにあまり目を向けていなかったようです。

ところが、戦国末期になると、豊臣秀吉は天下を掌握する過程で朝廷に近づき、武家が公家に代わり関白となって天下を文武双方の力で治める、いわば新たな平家政権の確立を目指しました。そのため、武術一辺倒から文武両道の家柄を作る動きが出てきました。

もともと、豊臣秀吉や徳川家康は多くの大名を傘下に収めつつあった時から、書籍や印刷文化に関心を懷き、自分の勢力拡大に利用してきました。特に、秀吉は和歌に、家康は漢籍に注目したようにみえます。秀吉や家康らの戦国大名が、天皇家や摂関家らが朝廷で独占してきた文化事業に目を向けたのには、それなりの理由が考えられます。おそらく、古代より朝廷内では文化素養が求められ、それが大臣に任官する者の家格の証にもなったのでしょう。また、武家政治の手本である鎌倉幕府で北条氏や長井氏ら幕府の要人が文庫を構え、中国の政治を参考にして幕政に携わっていたことも頭にあったのでしょう。

豊臣秀吉が関白となって公家の頂点に行きつき、文化の掌握あるいはそれに関心を向けていたことを象徴する出来事があります。九州平定後の天正15(1587)年10月1日に開いた北野大茶会は関白太政大臣、朝鮮の役のさなかの文禄3(1594)年の吉

野山での花見は前関白（太閤）太政大臣、亡くなる年の慶長3（1598）年3月15日の醍醐の花見を太閤の名のもとで開催したことです。戦いは武家家臣団に任せて、人臣として位階をきわめた公卿の秀吉は、文化事業を主宰していました。

豊臣秀吉が文化事業を進めていた時、甥の豊臣秀次も古典籍の収集をし、文化人を目指していました。

豊臣秀次が関東・東北に出陣した折、奥州藤原氏の中尊寺大蔵經、北条氏の金沢文庫本、上杉家に係わる足利学校本という武家ゆかりの写本や漢籍を奪いとつて京で披露してから、天下人として文化を主催する者には、宋版などの漢籍が武家の棟梁を代弁する飾りとなつたようにみえます。京の公家らも、豊臣秀次のコレクションに注目していましたし、おそらく秀次と親しい伊達政宗にもその影響があったと思われます。

豊臣政権下、伏見・大坂時代、戦国大名家の家門が確定しつつあった時、大身の武家が和書とともに漢籍を蒐書するのは、このような政治的背景があったからでしょう。特に、漢籍の中で最も古い宋代の印刷本である、通称「宋版本」と言われる書籍の持つ稀少性に注目するようになりました。

（3）伊達政宗の蒐書と漢籍群から見える動向

戦国大名家は、大きく分ければ、①鎌倉幕府の御家人が各地の地頭・守護となり土着して小領主となった武家、②室町幕府の守護大名や幕府奉公人の流れをくむ武家、③地域の小領主・土豪・野武士など戦国時代に新たに抬頭した武家、の三種類の出身からそれぞれ家門を興しました。

戦国を生き抜いた大小各大名は、豊臣政権のもとで、新たな序列化と封地の再分配を受けることになります。すると、相応の家門の由来を示す必要が出てきて、武力の他、財力、文化力が問われることになります。豊臣秀吉が武家のみならず、公家の頂点に立つと、武家とは違って伝統文化の保持者・継承者との位置づけを持つことになります。家臣団に組み込まれた全国の武士たちも、朝廷での序列化のために秀吉推挙によって官位を相応に得て、朝廷の貴族になります。その際、家名と系図、武家としての武具、知識ある古い家柄としての中国の学問を伝える漢籍、とりわけ鎌倉幕府を連想させる宋代出版の書籍が家門の由緒を物語るものとして熱望されることになります。

戦国大名は、五山の僧らを軍師や参謀として招へいしたり、子弟を寺院に入山させ、学問を修めさせたりしていましたから、その関係で、五山僧を軍師から政治顧問として採用する伏見時代前後ごろに宋元版漢籍を手にいれたようです。同時に、宋元版漢籍をリプリントした「五山版」の日本出版の書籍も手に入れたと思われます。

京都五山を中心とした多くの寺院は、今日の大学のような場所であり、図書館や大学出版社を持つ最高学府で、宋元版の漢籍や五山版がありました。今川家、浅野家、伊達家、毛利家、徳川家などの戦国大名は五山僧とのつながりがありましたから、宋元版を入手したルートの一つが京都五山と推測されます。

戦国大名らが書籍を蒐集する流れは、徳川家康の出版推進と文治主義が本格化する伏見時代に一層強まります。徳川家康は、いわゆる五大老として伏見に本拠を置いていたころから漢籍の蒐書と出版に力を入れ始めました。家康は、亡くなる時まで書籍を集めて読み、そして出版させていました。京都の伏見に学校を作り、「伏見版」と呼ばれる本を出版させていましたので、伏見城下に集まった戦国大名も当然その影響を受けたと思います。

このような伏見・大坂時代の文化的社会背景があることが、戦国大名家が漢籍などの蒐集を行なう原動力になったと思われます。

次に本題である伊達家の蔵書、戦国大名の政宗に目を移しましょう。

現存する伊達家の蔵書目録は明治20（1887）年以降の作成であるため、いつ頃の蒐書で、何を大切にしていたかは断定しにくい状況にあります。おそらく



戊辰戦争の結果と関係するのでしょうか。しかも、伊達家の蔵書は、かなり散佚しました。今日、亘理伊達家の蔵書は、伊達市と足利学校にかなり残っていて手がかりがありますが、他の伊達家一門の蔵書についてはよくわかりません。

伊達家の書籍蒐集を考える時、戦国大名の伊達家、つまり、政宗の蔵書がやはり極めて重要です。その特色を、特徴ある漢籍・和書から指摘するため、宋版本、五山版、古活字本、朝鮮本の順でそのいくつかを紹介します。

①宋版本

- 酔翁談錄
- 真文忠公讀書記

『酔翁談錄』は、小説の筋書きのようなもので、宋代の講釈師のタネ本と言われています。今日では、元刊本としてみられていますが、かつて、明代の蔵書家の目録に、古写本が記録される珍本です。現在、天理図書館にあります。

『真文忠公讀書記』は修理のために東京へ移したと記録されていますが、行方はわかりません。おそらく、2種の「宋版」は、伊達家でも特別なものであったでしょう。



宋版本 酔翁談錄

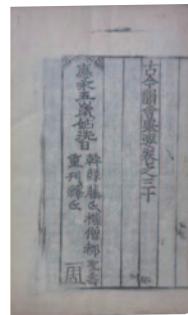
②五山版

五山版は京都・鎌倉の五山の禅院で出版されたもので、鎌倉時代末から江戸時代初期まで出版されていました。五山僧らが中国の漢詩文、とりわけ宋代の詩文集を学ぶための本も多く、禅宗の語彙、作詩字典などが中心です。今日では、次の4種が残ります。

- 古今韻会挙要 16冊(応永5(1398)年刊)
- 韻府羣玉 20冊(元統甲戌梅渓書院覆本)
- 聯新事備詩学大成 10冊(至正乙未翠巖精舎覆本)

■ 杜工部詩集

6冊(戊申會文堂刊覆本)
五山版は伏見時代以前、あまり流通はしませんでしたが、京坂の地で印刷がされることが多かったので、買うにしろ贈与されるにしろ、上洛した当主、つまり政宗時代の蒐集ではないかと思います。



五山版 古今韻会挙要



五山版 韵府羣玉

③古活字本(伏見時代から江戸初期までに活字で出版した本)

■ 観世謡曲書 99冊

これは和書ですが、嵯峨本とか光悦本と呼ばれる王朝料紙風の紙に活字を組んで作った印刷本です。伏見時代の復古調にして社会の頂点に立った戦国大名の華やかな一面を窺わせ、能楽を武家儀礼に取り込む時代の産物で、政宗の蒐集と考えられます。あるいは、将軍綱吉の能楽好みに合わせた第5代藩主・伊達吉村の蒐集であったかもしれません。

■ 貞觀政要 (慶長5(1600)年)

一方、伏見の円光寺で徳川家康が、関ヶ原の戦いのあつた年に木活字で出版させたこの書には、後記に秀頼(幼君)に忠義を尽すと書いています。しかし、実

際は、徳川家康が唐太宗を借りて天下の指図をすることを宣言した出版物です。従って、伏見版と呼ばれたこの書は、徳川家康が豊臣恩顧の大名を含めて各戦国大名に配り、自分の陣営に誘った本であったと思われます。

④朝鮮本（朝鮮王朝時代の大型出版本で日本の印刷本の手本）

■春秋左伝詳節句解	儒教系
■六韜・三略直解等七書	兵法
■東坡先生詩	文学
■破閑集	朝鮮文人作品

これらの本は、一見して好みによる蒐集ではないよう見えます。

文禄の役が始まった時、ソウル城内及び近郊の両班邸宅は進軍の早い日本武将の手に落ちたとも思われます。この時、小西行長や安国寺惠瓊、石田三成、浅野長政はソウルで指揮を取っていましたので、王宮や、政府高官らの宝物や書籍が残っていたならば、彼らが接收し、名護屋城へ戦利品として秀吉に献上したかもしれません。

一方、伊達家の朝鮮本は、政宗が出兵して得た戦利品と伝えられていきましたが、果たしてそうでしょうか。たしかに、文禄の役で第二陣として渡海し、浅野幸長隊に参与して半島の南端の蔚山、そして晋州攻撃に加わり、わずか数ヶ月で九州に戻った後、浅野幸長とともに豊臣秀次謀反事件に連坐しています。晋州攻撃の主力浅野幸長の方が伊達政宗より多く戦利品を手にしたはずですが、現存本を見る限り、伊達家の方が朝鮮本は多く伝存します。また、浅野家、伊達家の朝鮮本は、いずれも文禄より古い刊本が多く、文禄慶長の役以後、半島には古い本は少なくなっていることを考えれば、江戸時代以降の購入はまずなかったと思われます。もし国内での本の移動があったとしたならば、それは、戦時の戦利品が考えられます。徳川家康や前田利家など朝鮮半島に渡海しなかった戦国大名が朝鮮本、とりわけ宣賜本（印章と下賜の文字がある本）と呼ばれる国王から大臣などに与えられる国家出版本を持つことは、それを持っていた大名から取り上げたことを窺わせます。それこそが、関ヶ原の戦いでした。

おそらく、伊達家の朝鮮本は、浅野家と同様に、関ヶ原の戦いの後、徳川家康が西軍の大名から没収したもの

の一部を、恩賞として与えたものではないでしょうか。

⑤明刊本

だいみんいつとうし

■大明一統志

さんかいかんし

■山海関志

伊達家の漢籍には、明代の版本が多く、古いものは正徳年間以前のものがあります。その中でも、『大明一統志』『山海関志』は明朝の地理書です。朝鮮半島から明國への貿易を望む秀吉政権は、武力で進攻する結果となりました。朝鮮出兵を命じられた伊達政宗が、その指南書として文禄・慶長頃に蒐集したかもしれません。『山海関志』は浅野家も所有していますが、同じ頃の蒐書だと思います。なお、伊達家には、政宗没後の清代の漢籍も多数ありますが、第2藩主・忠宗以降の蒐集です。



明刊本 大明一統志

⑥江戸和歌書

こみずのあいんぎょせいわかしうう

■後水尾院御製和歌集

ごみずのあいんざまごてんさんくのうつし

■後水尾院様御添削之写

和書の中で注目すべきは、將軍徳川秀忠・家光と関係の深い後水尾天皇にかかる朝廷との結びつきを示す写本を多く持つ点です。第3藩主・伊達綱宗は母方を通じて、後西天皇といふことになるため、のちの寛文事件^{※2}の背景が後水尾天皇に係わる和書からわかります。つまり、伊達家が和歌の本にかこつけて朝廷に接近し、徳川將軍家と対抗する勢力になろうとしていたと幕府にはみえたのかもしれません。それが、これらの写本の上から読めるのです。

伊達家、とりわけ政宗時代の蔵書構成を見ると、次のような点に気付きます。

①宋版本

五山僧を軍師とした可能性や豊臣秀吉に使えるために、上洛して入手したことが考えられます。武家の交流の際の調度品的存在でした。

②五山由来の旧刊本

宋刊本と同じように上洛の際手に入れたのでしょうかが、こちらは、読むなどの利用を考えた色彩が強いと思われます。

③慶長・元和頃の古活字本

豊臣政権から徳川政権の移行時、京坂方面の上洛時の入手が考えられます。儒学書や、歴史書が出版の主なものですので、文治を見越した購入でしょう。

④朝鮮本

豊臣・徳川政権との関係を窺う最も良い書籍群で、伊達家が文禄の役や、関ヶ原の戦いに行きつく軌跡を示すかもしれません。

⑤元刊本・明前期刊本

兵学・富国などのため、あるいは外国進出を前提とした国情を探るための書籍が中心で、当時の最先端の情報収集の現われです。

⑥和歌写本

朝廷との関係が窺え、寛文事件への伏線が分かります。伊達政宗は、ここで示した写本ができた時にはすでに亡くなっていました。

このように、伊達家の政治的動向の一端が、漢籍和書群から窺える点についてご理解いただけただどうか。

(4) まとめ

一 戦国大名家の家門形成と宋版本の蒐集一

豊臣氏の全国平定が始まると、北山・東山文化の継承とばかり、豊臣秀次も典籍・古筆を蒐集したことから、更に書籍文化が広がって行きました。その象徴的出来事が、豊臣秀吉の茶会であり、歌会でした。つまり、文化的教養の裏付けが武将にも求められる時代となり、その裏付けに古書の蒐集が盛んになって行ったのです。

武具で身を固めた戦国大名は、家門の樹立のため、家系図を整え、系譜に相応した備えを始めました。その一つが、漢籍和書の蒐集でした。とりわけ、漢籍の中でも王者ともいべき宋版本の蒐集は教養ある武家としてのたしなみであったように見えます。つまり、



宋版本はいかなる内容であってもかまわず、読む書籍というよりは名物としての書籍だったのです。茶器の名品を集めることは、一種の芸ごとの中かもしれませんのが、宋版などの唐渡りの古書を備えるのは、「大明の士大夫」の心得に倣うものであったように見えます。おそらく、宋版は、武将が戦国大名から封建大名に変身する一つの神器であり、数ある典籍の中でも、その役割はまた別格であったのでしょう。

伊達家も、眞徳秀文集(『眞文忠公讀書記』)と短編小説集(『醉翁談録』)の宋版2種をもっていましたが、封建社会の道徳の手本となった儒学書ではありませんでした。

江戸以前から身を興した武家にとっては、書籍は実用品ばかりではなく家門を示す飾りでもあり、名門としての系図・経歴をバックアップするための武門の「たしなみ」の一つでもありました。とりわけ、宋版の本は、当時流行していた能や謡曲、茶湯とは次元の異なる文化的象徴性の高いもので、それは、鎌倉幕府の北条氏が所有した宋版本の伝統にさかのぼり、幕府継承者としての地位も宋版本が代弁していたかもしれません。それゆえ、伊達家でも宋版本を持ち、尊重したのでしょう。

*1 寺格の高い禅宗(臨済宗)の寺院。

*2 一般に「伊達騒動」とも呼ばれる仙台藩のお家騒動。